

平成25年11月29日

生駒市議会議長 中谷尚敬様

環境文教委員会委員長 白本和久

委員会調査報告書

当委員会で調査した事件の調査結果について、生駒市議会会議規則第107条の規定により、下記のとおり報告します。

記

- 1 派遣期間 平成25年11月11日(月)～12日(火)
- 2 派遣場所 広島県府中市、福岡県福岡市
- 3 事 件 小中一貫教育の導入と運営について
- 4 派遣委員 白本和久、恵比須幹夫、井上充生、有村京子、浜田佳資、西山洋竜
- 5 概 要 別紙のとおり

(別紙)

環境文教委員会 視察報告書

平成25年11月11日(月)～平成25年11月12日(火)

視察先	広島県府中市 府中学園
施策等の名称	小中一貫教育の導入と運営について
視察の目的	小中一貫教育を実施されている自治体を訪ね、調査することにより本市が今後導入を計画している小中一貫教育の参考とし、反映していくこと。
施策等の概要	<p>1 小中一貫教育の導入経緯</p> <p>府中市の小中一貫に関する取組みの経緯は以下の通りである。</p> <p>平成15年度 小中一貫教育の検討を開始。</p> <p>平成16年度 小中一貫教育の施行を開始</p> <p>平成17年度 「府中市小中一貫教育構想図」を策定</p> <p>平成18年度 「府中市小中一貫教育推進プラン」を策定</p> <p>平成20年度 全市において小中一貫教育を完全実施。 4小学校と中学校を統合した府中学園（児童・生徒数約1000名）が開校</p> <p>現在は、全市実施をしているが、形態は地域の実情に応じて様々である。市内4中学校区の内、2中学校区が施設一体型、中学校と小学校が離れている「連携型」および中学校と小学校が離れていたり隣接していたりする「併用型」が各1中学校区ずつとなっている。</p> <p>2 小中一体型校舎における施設整備の在り方について</p> <p><敷地> 日本たばこ産業（JT）の広大な工場跡地を活用。</p> <p><校舎></p> <ul style="list-style-type: none">・三階建てで低層。・教室の配置は、普通教室を小中でゾーンわけしている。・普通教室は、「総合教室型」（小学1、2年）、「オープンスペース型」（小学3、4年）、「教科教室型」（中学全学年）——の3タイプに分かれている。・学年ごとに教室のドア等の色分けされており、楽しさと分かりやすさがある。・特別教室は教科ごとにまとめて配置。小中で隣接する別々の教室としている。・オープンスペース、メディアセンターなど各施設が充実している。・色彩、デザインとも明るく洗練されている一方、木材が多用されており温かみを感じられる。

<体育施設>

- ・運動場、体育館は小中別々に設けられている。
- ・プールは、体格差に対応できるよう、底が可動式となっており水深を調整できる。イニシャルコストは2施設を設けるより安価となるが、メンテナンスに手がかかる、とのことであった。

3 小学校教員と中学校教員の連携について

- ・職員室は校舎1階中央部に配され、小中学校共用となっており、情報交換、交流が図りやすい環境となっている。

4 施設一体型小中一貫教育の学校運営について

- ① 授業時間が小学45分、中学50分と異なることへの対応は、日に5回（1，3，5校時と昼休憩開始時、掃除開始時）同時刻スタートし、掃除開始時以外の4回でチャイムを鳴らしている。ずれる時間については、2，3校時の間に小学校は20分の大休憩を入れるなどして調整している。
- ② 運動会・体育祭については、小中合同の企画（ふれあいスポーツフェスティバル）を春に行い、小学校だけの運動会を秋に実施し、児童の出番が少なくなるということに対応している。特に保護者からの要望が高いとのこと。
- ③ 小と中の教員の乗り入れ授業を実施するとともに、生徒指導や授業方法などについての交流を行い、良いところを取りいれている（小学校の指導や授業の細やかさ、中学校の専門性など）。
- ④ 児童・生徒の異年齢交流を推進。中学生が小学生に教えるということも行っている。
- ⑤ 生徒指導については、小中共通の生徒指導規定の周知と徹底を行い、一貫した指導を行っている。

5 小中一貫教育を実施した成果

- ① 小中一貫教育に取り組み始めてから、不登校児童生徒は減少している。一貫教育が生徒指導面の連携や異年齢交流活動を円滑にして「中一ギャップ」の解消に効果を上げている。また、全般として不登校児童生徒が減少している。
- ② 学力、学習状況の調査結果を見ると、全ての教科において国・県の平均正答率を上回っており、学力の向上が図られている。
- ③ 施設一体型の最大の利点を確認したところ、小と中の教職員、子どもたちが同じ場で日常的に交流できることに尽きる、とのことであった。

<p>考察</p>	<p>(本市施策等への反映の考え方など)</p> <p>① 保護者との係わりにも重きをおき「保護者と取組むプラス5」とし、家庭での子どもの教育や生活習慣の向上を促す取り組みはとてもユニークである。</p> <p>② 小中の学校生活を通じて、子どもたちが9年間の移り変わりや成長を色や形と発見によって感じられるよう、ゾーン毎に異なる色を用いて校舎がデザインされており、子どもが自ら成長を感じられる創意工夫は生駒市においても十分参考となる。</p> <p>③ 小中一貫教育の実施により、特に小学校から中学校へ進学した中学校1年生の不登校率が顕著に減少し、また学力全般においても、学力の基礎・基本が県平均を上回って確実に定着していることを示す実績データは興味深い。</p> <p>④ 施設一体校の場合、小学生と中学生の体格差に配慮した施設内容・配置としなければならない。</p> <p>⑤ 施設一体校の場合、運用面について、授業時間の差からくる問題を指摘する意見もあるが、それは運用しだいで対応できるようである。</p> <p>⑥ 生駒北小中の場合とは、学校の規模が異なるので、同規模施設一体型小中校について調査が必要である。</p> <p>⑦ 施設一体型の場合であっても、小学校、中学校に区分し、入学式、卒業式はこれまで通り行うことが良い。</p>
<p>委員の意見</p>	<p>① 保健室の一体化が職員の共用につながり、スタッフ不在の防止につながっているとの説明を受けた。しかし、小学生と中学生の体の発達の違いに対する具体的な対応方法が見えず、この点については慎重に検証する必要性を感じた。</p> <p>② 小学校と中学校の連携が不十分というのは子どもにとってはマイナスであり、何らかの形で小中の連携教育については推進するべきである。しかし、それは1つの中学校区のみで行うのではなく、府中市のように全市での実施を前提に検討するべきである。特定の小中学校の課題ではないし、施設一体にするか否かの問題でもないからである。</p> <p>③ 教室の形態や運用などは、施設一体校か否かに関わらず良いものは取り入れるべきである。また、連携開始前においても同様である。</p> <p>④ 小中一貫教育は、学力について一定の成果をあげているようだが、体力向上については目立った報告がなく、要検証である。</p> <p>⑤ 小中連携教育を行う場合、小学校と中学校の教員、児童・生徒が同じ場において活動し学ぶ施設一体型がより効果的であると言える。日常的に交流できるからである。</p> <p>⑥ 上記の交流内容は、先進校に良く学ぶことが必要である。実際に行ってみないとわからないことも多いからである。</p>

視察先	福岡県福岡市 照葉小中学校
施策等の名称	小中一貫教育の導入と運営について
視察の目的	小中一貫教育を実施されている自治体を訪ね、調査することにより本紙が今後導入を計画している小中一貫教育の参考とし、反映していくこと。
施策等の概要	<p>1 小中一貫教育の導入経緯</p> <p>平成16年度 小中連携教育の検討を開始した。</p> <p>平成18年度 1小学校1中学校の5ブロックで第1次モデル推進校でスタート。</p> <p>平成19年度 複数小学校1中学校の8ブロックで第2次モデル推進校を実施。</p> <p>平成20年度 全中学校ブロックにおいて小中連携教育を実施。</p> <p>福岡市では「一貫」という言葉は使わず、「連携」とし、これにこだわっているとのこと。「一貫」はその学校でしか活用できないが、「連携」は他の学校でもその教訓・実践が活用できるからであるとされている。</p> <p>福岡市は全市で小中連携教育を実施している。69中学校区があるが、施設一体型は現在照葉1校であり、2校が準備中である。</p> <p>照葉小中校は、小学校、中学校という形を残し、各入学式、卒業式を実施している。児童・生徒数は約千人である。人口急増地の埋立地に建設された新設校であり、将来的には1200人規模となる予定である。</p> <p>福岡市全体の取り組みである小中連携教育の方策として、義務教育9年間を見通して、①小学校1年生～4年生＝「前期」、②小学校5年生～中学校1年生＝「接続期」、③中学校2年生～3年生＝「後期」の3つの発達段階に応じた連続性のある教育活動を推進していることが特徴。中でも、接続部分となる小5～中1の3年間を重視した「中一ジャンプ(※)」できる取り組みに力を入れている。</p> <p>※「中一ジャンプ」とは、中学生になって、子どもが感じる小学校生活との様々な違いを乗り越え、順応していく力を身に付けさせることを言う。</p> <p>2 小中一体型校舎における施設整備の在り方について</p> <p><敷地> 海面埋立地の広大な敷地に立地しており、面積は4万㎡にのぼる。</p> <p><校舎></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室の配置については、普通教室は小、中でゾーン分けしているが、特別教室については、教科ごとにまとめて配置し、小と中で隣接する別々の教室としている。

- ・学年ごとに教室のドア等の色分けがされており、楽しさと分かりやすさがある。教室と廊下の上にスペースを設け、可動壁で仕切ることができるなど様々な工夫がされている。
- ・小学校ゾーンと中学校ゾーンの上に、職員室等共通の施設を配置している。職員室は小中合同で、小と中の教員の机をブロックに分けて配置している。
- ・ランチルーム、交流ロビー、ステップシアターなど各施設が充実している。
- ・交流ゾーンを挟んで小学校ゾーンと中学校ゾーンが明確に区別されているので、小学校と中学校のけじめがうまく演出されている。
- ・色彩、デザインとも明るく美しく、洗練されている。
- ・木材が多用されており温かみを感じられる。

<体育施設>

- ・運動場、体育館は小学校と中学校で別々である。間にはフェンスがある。校長先生から「明らかに一緒にない方が良い。分けないと危険。体格差があり、中休みや部活で危険な場合もある」と伺った。なお、教師の監督下においてはこだわらずに活用しているとのこと。
- ・プールは、体格差に対応できるように、小中別に2つ作っている（同一場所で隣接、各5コース。飛込台は中学校用プールにのみ設置）。

3 小学校教員と中学校教員の連携について

- ① 小中の教員は互いの文化の違いを理解しつつ、かつ情報を共有するよう努めている。
- ② 中学校の教員が、専門性を生かし、小学校の音楽、美術、体育の指導を行ってきた。さらに、最近英語が加わった。
- ③ 中学校教員による一部教科担任制（家庭科、音楽、図工）が実施されている。

4 施設一体型小中一貫教育の学校運営について

- ① 授業時間が小学校45分、中学校50分と異なることへは、チャイムを鳴らさないことで対応している。
- ② 運動会・体育祭については、小中合同で行っている。一体感醸成に効果が大きいとのこと。小学校だけの運動会の実施については検討課題、新設校なので歴史がなく保護者からの要望は少ないとのこと。
- ③ 児童・生徒の異年齢交流を、合同運動会をはじめ、合同自然教室、読書活動、縦割りランチルーム、縦割り清掃、合同避難訓練等さまざまな取り組みで推進している。
- ④ 児童生徒の交流活として、ランチルーム給食、小中学校合同運動会などが実施されている。

	<p>5 小中一貫教育を実施した成果</p> <p>① 施設一体型の最大の利点は、小と中の教職員、子どもたちが同じ場で日常的に交流できることであり、それにより小と中の教員の学校文化の違いを認識しつつお互いの理解が深まる、連携が取れるようになった。具体的には、児童生徒の状況についての情報交換、お互いの指導方法を学びあう、生徒指導についての共通理解・実践などがあげられている。</p> <p>② 児童・生徒の間では、小学生からは中学生への憧れ、中学校への不安解消が、中学生からは幼い者へのやさしさ、自尊感情が生まれるとのことであった。中1での不登校はほとんどゼロとの説明であった。</p>
<p>考察</p>	<p>(本市施策等への反映の考え方など)</p> <p>① 小規模施設一体小中校の調査が必要である。</p> <p>② 施設一体型、連携型、いずれにせよ、施設面・運用面で良いところを取り入れることが必要である。</p> <p>③ 人間関係など、小学校のときの課題がそのまま中学校に引き継がれること（中学校入学でのリセットができない）、合同企画の進め方ーなどが課題となっており、検証する必要がある。</p> <p>④ 保健室は当初、小中一体化の保健室にて運営していたとのこと。しかし、小学生と中学生の身体の発育の違いにより、後に保健室を分離するに至ったとの説明あり。</p> <p>保健室以外にも、プールや運動場のように、特に小学生と中学生の身体の発育の違いに配慮した施設区分は、生駒市の小中一貫教育を検討していく参考にすべき部分である。</p>
<p>委員の意見</p>	<p>① 特に施設面については、運動場を小学校と中学校に分けることについてはかなり重要である。この点、北小、北中の面積や形から慎重に検討されなければならない。北小中施設一体型一貫校を北小の所にするか北中の所にするかはこれから検討するということであるが、いずれか一方、ということにこだわらず検討すべきである。</p> <p>プールについては、床可動式とするか別々に作るかも慎重に検討すべきである。</p> <p>② 照葉小中学校は現在、福岡市内で唯一の「施設一体型」の小中学校である一方、他校はすべて小学校と中学校が離れた「隣接型」とのこと。この両者を比較して、「中一ギャップ」と子どもの学力面の効果について職員へ聴き取りを行なったところ、日常から小・中学生が相互に交流できる環境下にある「施設一体型」のほうが結果としてよいとの見解もあり、単なる小中連携教育にとどまらない慎重な検証が必要と感じた。</p> <p>③ 基本的には府中学園の視察によるものと同様の意見であり、小中教育連携については全市的検討が必要であること、施設一体校がより効果的</p>

であること、交流については先進校に良く学ぶこと、施設一体型の場合児童・生徒の体格差に配慮した施設内用・配置が必要であること、運用面の諸問題には対応可能であること、小学校・中学校の区分と入学式・卒業式についてはこれまで通りが良いこと、は同じである。

- ④ 小中一貫教育は、学力について一定の成果をあげているようだが、体力向上については目立った報告がなく、要検証である。